

受動文と認知格モデル (格の日英語対照研究)

Passive Constructions and Cognitive Case Model

竹 鼻 圭 子

So God created man in his own image, in the image of God created he him, ...
(Genesis 1:27)

And the whole earth was of one language, and of one speech. (Genesis 11:1)

1 序

上記の旧約聖書からの引用は、ヨーロッパ文明の源流にあるユダヤーキリスト教的
世界観あるいは言語観を表象した言説として余りにも有名である。こういった世界観や言
語観は20世紀の現代にあっても、新言語学やコンピュータ科学の内にも生き続けている
という指摘が、最近よく見られるようになってきている。そして生命科学、人工知能、
情報美学等、ユダヤーキリスト教的 world view あるいは言語観を脱却しようとする試みが各
分野で進みつつある。言語学の中では生成文法を認知意味論の立場から批判する場合に
そのような視点がとられる。言うまでもなく、生成文法は統語論、つまり規則の体系と
しての普遍文法が先天的に備わっているというこを大前提として、その理論の細密化を
進めている。それに対して、人間の認知体系をこそ言語体系を支える要であるとするの
が認知意味論である。本稿では、受動文を例にとり、認知意味論の成果ばかりでなく、
情報美学、生命科学、言語哲学等の知見をふまえて、言語体系を支持しているのは、生
成文法の言う先天的普遍文法でも、認知意味論の言う認知機構⁽¹⁾だけでもなく、人の脳⁽¹⁾
の外側に作り出された情報体系、記号体系の高度な自己組織化、複雑化(self-complexing)
であることを示してゆきたい。

まず2節で、Shibatani (1985) に基づき、受動文というものが多くの言語において、
英語のように明確に定義しがたいことを取り挙げる。3節では山梨(1987、1989、1994)
の認知格モデルを取り挙げ、多くの言語事実を説明する枠組みとして格のゆらぎや多重
性という自己組織化の方向性の視点を導入すべきであることを示す。4節では、本稿の
理論的背景を概観する。5節では日本語と英語の受動文を認知格モデルから考察するこ
とによって、格の多重性、階層性という自己組織化、複雑化の方向性の導入が有効であ

ることを示す。

2 受動文とプロトタイプ

ここでは Shibatani (1985) を手がかりに、受動文を例にとって格のゆらきや多重性について考察する。受動文については、英語では (1a) 日本語では (2a) をプロトタイプとし、それぞれ (1a')、(2a') のような説明がされ、そこから何らかの逸脱が起こった例として、(1b) や (2b) が取り挙げられ、(1b')、(2b') のような説明が加えられてきた。

- (1) a. The vase was broken.
 a' [e] be broken [the vase]
 b. The bed was not slept in.
 b' [e] be not slept in [the bed]
 前置詞 in は動詞に組み込まれて複合過去分詞を形成する。⁽²⁾
- (2) a. 太郎は叱られた。
 a' *Taroo wa sikar-are-ta.*
 T. TOP scold-PASS-PAST
 b. 太郎は花子にカメラを壊された。
 b' *Taroo wa Hanako ni kamera wo kowas-are-ta.*
 T. NOM H. DAT cameraACC brake-PASS-PAST
 indirect (adversative) passive

Shibatani (1985) は、日本語、英語以外にも多くの言語のいわゆる受動文を分析し、その結果として、次のようにそのプロトタイプを特徴づけている。

- (3) Characterization of the passive prototype.
- a. Primary pragmatic function: Defocusing of agent.
 b. Semantic properties:
 (i) Semantic valence: Predicate (agent, patient).
 (ii) Subject is affected.
 c. Syntactic properties:
 (i) Syntactic encoding: agent— \emptyset (not encoded).
 patient—subject.
 (ii) Valence of P[redicate]: Active = P / n;
 Passive = P / n-1.

d. Morphological property:

Active=P;

Passive=P[+passive].

このように受動文は被動作主を主語とすることを核にしているわけであるが、他方において、たとえば Bates and MacWhinney (1982) は、主語のプロトタイプを次のように特徴づけている。

(4) プロトタイプ的な主語は動作主 (AGENT) かつ話題 (TOPIC) である。

したがって、受動文自体が主語のプロトタイプに当てはまらない被動作主を主語としている点においてプロトタイプから逸脱しているわけである。しかも、その受動文というカテゴリーの中においても、例(2)のような逸脱が起こってきていることになる。この様な事態に、何らかの説明を試みようとするとき、3節で取り挙げる山梨 (1994) にある認知格モデルが有効であることに気づく。そこでは、格と格との重なりを「格のゆらぎ」として捉え、また一つの名詞に深層格と認知格を設定して、多重な意味を捉えようとしている。詳しくは次節にゆずるが、たとえば (1b) に例示したいわゆる疑似受動文は、ME から発達してきた構文であることが知られており、格接辞の水平化及び抽象格から構造格への移行という観点から説明されてきた。この説明では、構文の発達の動機が不明であり、より多くの表現形式を獲得しようとする方向、すなわち言語体系の自己組織化、複雑化の一端と位置づけていこうとするのが我々の立場である。伝統文法、新言語学を問わず、これまで言語を規範化、規則体系化しようとしてきた点が、多くの哲学者や人文科学者の批判するところであった(4節参照)。言語体系を単純な先天的普遍論から解き放ち、人間の認知を初めとする多くの機能に支持された複雑系と捉え、その自己の組織化、複雑化こそ問い直していく必要がある。

3 認知格モデル

既に紹介したように、ここでは山梨 (1994) の認知格モデルを取り上げ、日常言語という記号系を複雑系として捉え、その自己組織化、複雑化の課程をも説明し得る理論としての発展性を展望する。

そもそも認知格モデルは、格文法や生成文法といった理論言語学において、格、特に「深層格」が、記述項として使われながら、十分な理論的位置づけがなされていないという重大な問題点に、認知意味論の立場から光を当てようとしたものである。すなわち、それぞれの文法モデルにおいて、「深層格」、「 θ -役割」(θ -roles)、「主題役割」(thematic roles) 等と呼ばれる概念の位置づけを試みたものなのである。

認知格モデルは、大きくわけて二つの重要な要素から構成されている。一つは、「格の

取り挙げる日本語のいわゆる「迷惑受け身」等を説明するために、これまで「エンパシー」や「なわばり」という言葉で説明されてきた話者あるいは聴者の対人心理を反映するような、いわば対人心理格とでも言うべき認知格のサブカテゴリーを考えていくことを試みてみる。すなわち、認知格を平板な格カテゴリーの集合と見るのではなく、様々なサブカテゴリーをもち得る可能性をもつダイナミックな枠組として捉えてゆき、言語体系の自己組織化、複雑化の一端を示せばと考えている。

4 背景

これまで繰り返し述べてきたように、本稿では日常言語を人間の作りだした高度な情報体系、記号体系であるとし、その体系自体は先天性に依拠せず、自己組織化、複雑化により作り出されてきたものであるという立場をとっている。このことは直ちに構造言語学の「発見の手順」の追求への言語学の回帰を意味するものでもないし、言語を支える人間の脳の器官の種としての特異性を否定するものでもない。ただ現時点の生成文法の先天性についての捉え方には批判的であり、その依って立つところの一部を以下に断章的に示す。ウィトゲンシュタインの Preface の言葉を借りると、“After several unsuccessful attempts to weld my results together into such a whole, I realized that I should never succeed.”ということになるだろうが、それぞれの思索が直接関係してきたとは限らないので、この形の方がその真意を歪めずにすむと思われる。

チョムスキー：

もし火星人が宇宙からやってきたとして、彼が普遍文法に抵触するような言語でしゃべったら、英語やスワヒリ語のような人類同士の言語を習得するやり方では、彼らの言語を習得することはできないだろう。

アーペル：

この困難は、私見によりますと、第一に事柄それ自体に、つまり、自然の領域から自由の領域への、それ自体がまだ本能にも類似する移行の媒体たる、自然的・人工的なものとしての言語そのものの本質にもとづくものであります。と同時に、この困難は、第二に、チョムスキーの言語理論の端緒が一面的であること、恐らくもっと適切に言えば、不完全であることによると考えられるのです。私見によりますと、その一面性ないし不完全性は、とりわけ妥当な意味論の欠如、ならびに、それをまじってはじめてチョムスキーの要求する言語運用理論を可能にする、實用論にまで拡大された言語能力理論の欠如であります。

パットナム：

どのような言語といえども、事物の考えられうる集合のすべてをあらわす名辞を全部ふくむことはできないのであって、少なくとも、事物の数が無限である場合はそうである、ということは集合論の定理である。

われわれの全体的な「概念体系」の究極の目標は、まさしく予測と経験の統御あるいは、たとえそれがどうであれ、それに加えて「単純性」にある。

ウィトゲンシュタイン

ある語の意味とは、言語ゲームにおけるその語の使用である。

言語ゲームというものは、隅から隅まで規則によって縛られているというわけではない。

室井 尚

そもそも人間だって生まれたときから「言語中枢」を持っているわけではないのだ。問題は遺伝子による生物内部の情報処理機構の「外部」に、もう一つの「記憶装置」を作り出そうという意志＝力ではないだろうか。つまり、脊椎動物の情報処理センターが脳であるとする、人間は脳はの「外部」に別な情報処理装置を作ろうとしてきた。それが人間の文化であり、その情報処理装置の巨大システムが文明であると考えることができるのではないだろうか。

このような「外部」の情報処理装置、あるいは記憶装置（データベース）の最初のものは言語であったろうし、意図的に作られた道具や埋葬などの儀式であったろう。

要するに、コンピューター科学は「意識」や「精神」を、分子生物学は「生命」をナノテクノロジーは「物質」を、それぞれ「情報」あるいは「情報の組織化」の問題として捉え、そこにそれぞれの「編集可能性」を提起したわけである。それはこれまで「物理現象に還元することが不可能であり」、「人間が知り得ない神秘的で深遠な領域」と考えられてきた「心」や「生命」や「物質」を一元的に情報の組織化の問題として捉える新しい視点をもたらしたのだ。

そのほか、チンパンジーの様々な実験から、抽象的な記号の理解ばかりでなく、日常言語によるコミュニケーションの能力も備え得ることが報告されている。

5 日本語と英語の受動文

この節では、日本語と英語の受動文を取り挙げ、いわゆるプロトタイプから何らかの逸脱のある受動文が、3節で導入した認知格モデル、すなわち格のゆらぎや格の多重性といった観点からどのように分析されるかを示す。5.1では日本語の受動文について、対人心理関係格とも言うべき関係が多様に発達していることを示し、5.2では英語の受動文⁽³⁾について、文構造の拡大解釈による受動文の多様化を示す。そしてそのことから、各言語独自のより多様な表現形式を組織しようとする言語体系の自己組織化、複雑化の一端を示す。

5.1 日本語の受動文

日本語の場合、以下に示した例からも分かるように、いわゆる受動文 (7b、8b) だけでなく、使役文 (7c、7d、8c、8d)、benefactive 文 (7e、7f、8e、8f) においても文中の当事者間の利益関係が微妙に反映されていることに気づく。このことは日本語の敬語体系にもつながる事象であると思われる。このように日本語の場合には対人心理関係についての多様な表現形式が組織化され、発達してきていることが分かる。したがって、対人心理関係を反映し体系づけられたものが認知格に組み込まれる必要があり、一つの項に深層格といくつかの認知格とが多重に付与されることになる。ここでは網羅的に受動文を扱うことが目的ではないし、また、文脈における微妙な意味の変化を記述することも目的としないので、一般的な文脈における代表的な意味について論じている。⁽⁴⁾ (+) は、その対象にとってその行為が利益になることを示し、(-) は、逆に利益にならないあるいは迷惑になる場合を示している。

- (7) a. A先生は 学校を 辞めた。
 b. 学校は A先生に 辞められた。
 (-) (+)
 c. 学校は A先生を 辞めさせた。
 (+) (-)
 d. A先生は 学校に 辞めさせられた。
 (-) (+)
 e. A先生は 学校を 辞めてやった。
 (-) (+)
 f. 学校は A先生に 辞めてもらった。
 (+) (-)
- (8) a. おじさんは 花子に 靴を 買った。

b. 花子は おじさんに 靴を 買われた。

(-) (+)

c. 花子は おじさんに 靴を 買わせた。

(+) (-)

d. おじさんは 花子に 靴を 買わせられた。

(-) (+)

e. おじさんは 花子に 靴を 買ってやった。

(-) (+)

f. 花子は おじさんに 靴を 買ってもらった。

(+) (-)

以上の観察から、日本語の場合には対人心理関係を認知格のサブテカゴリーとして組み込んでいく必要があるように思われる。

5.2 英語の受動文について

次に、英語の受動文について、それと真偽値を同じくする能動文において、プロトタイプ的的被行為者を逸脱しているにも関わらず、受動文の主語となっている場合を取り挙げ、その方向での表現形式の多様化が発達していることを示す。英語の受動文の自己組織化、複雑化は、日本語のような認知格の多様化という形ではなく、構造の拡大解釈による多様化という形で現れる。すなわち、ME 以来、かつての与格、あるいは補文の主語が受動文の主語となり得るようになったこと(9)、及び、前置詞の目的語が受動文の主語となり得るようになってきたことである(10)。

(9) a. He was given a book.

b. She is believed to be happy.

(10) a. The bed was not slept in.

b. She was laughed at.

これらは、既にふれたように、格接辞の水平化により与格、属格といった抽象格が消失したこと、及び、その抽象格の消失にともなって前置詞が文の構造上、動詞に組み込まれることが起こってきたとして説明される。そして、後者のようないわゆる疑似受動文の場合には、明らかに認知格モデルにおける格の重複性あるいはグレーディエンスが観察される。たとえば、in the room などの in の「場所」の意味が sleep in の in には残っており、give in (屈服する) の in 等とは一線を画しているのである。こういったことは、我々の立場からは、構造格重視の傾向にともない、実際の文構造が受動化の要件を満たすなら、可能な限りの表現形式の多様化を得ようとする自己組織化、複雑化が進んできていると考えられるのである。

また、ここで言う「抽象格」や「構造格」は言うまでもなく深層格や認知格の表層格表示のあり方を示したものである。この表層格表示の性格付けに反映される変化に、深層格や認知格がどのように関係しているのか興味深い点であるが、今後の課題としたい。

6 結び

以上の考察から、認知格モデルの枠組みで日本語と英語を見た場合、その表現形式の多様性や発展性に異なった方向性があることが明らかになった。すなわち、日本語の場合には対人心理関係の表現の多様化への体系の自己組織化、複雑化が著しく、他方、英語は文構造の解釈の拡大による多様化への体系の自己組織化、複雑化が著しいのである。そしてこのことは「文法」や「言語学」のあり方そのものへの疑問をはらむものである：共時的な文法を記述することですべてを知ることができるのか？ 統語論において先天的普遍性は実在するのだろうか？と。広い意味での文化を直接生物学的遺伝子に依拠しない文化的遺伝子によって組織されていくものと捉えていく動きのある現在、自然言語もまた、その歴史的発展の意義や、それを支える生物学的身体組織といった視点から見直されるべき時がきているように思われる。

注

- (1) リチャード・ドーキンスが「ミーム」(文化的遺伝子、あるいは意伝子)と呼んだように、文化は遺伝子の外部の遺伝子、DNAに依存しない遺伝子であると考えられ、言語もまたそのように性格づけられる、「外部」情報処理装置やデータベースであると考えられる。
- (2) 竹鼻(1983)にも詳しいが、格のグレーディエンス、複合過去分子のイディオムとしての凍結度以外の要素として、文脈が複雑に関係する。
- (3) 能動受動文、中間構文等と呼ばれる、The book sells well.等のような構文も同様に考え得るものであると思われるがここでは受動文のみにとどめた。
- (4) 例えば、どのような文が benefactive の形式をとり得るかという点などについても、文脈による文法性についてのグレーディエンスが観察される。

参考文献

- Apel, K. O. 1976. 「チョムスキーの言語理論と現代哲学」、in 井口省吾 訳『チョムスキーと現代哲学』大修館。
- Bates, E. and B. MacWhinney. 1982. "Functionalist Approaches to Grammar." in L. Gleitman and E. Wanner, eds., *Language Acquisition: The State of the Art*, pp. 173-218, Cambridge U. P.
- Chomsky, N. 1981. *Lectures on Government and Binding*. Dordrech: Foris.
- 1985. The Omni Interviews. パメラ・ワイントロープ編、『現代科学の巨人10』旺文社。

- Fillmore, C. J. 1968. "The Case for Case." in E. Bach & R. T. Harms, eds. *Universals in Linguistic Theory*. pp. 1-88, New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Gruber, J. S. 1976. *Lexical Structures in Syntax and Semantics*. Amsterdam: North-Holland.
- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago U. P. 池上嘉彦、河上誓作他訳、『認知意味論』紀伊国屋書店。
- 松沢哲郎 1991. 『チンパンジー・マインド』岩波書店。
- 室井尚・吉岡洋 1993. 『情報と生命』新曜社。
- Putnam, H. 1975. *Philosophy of Logic*. 米盛祐二、藤川吉美 訳、『論理学の哲学』法政大学出版局。
- Shibatani, M. 1985. "Passives and Related Constructions: a Prototype Analysis". *Language* 61. 4: pp. 821-848.
- 竹鼻圭子 1983. 「英語の疑似受動文について」、『大手前女子大学論集』第17号。
- Wittgenstein, L. 1953. *Philosophical Investigations*. Oxford: Blackwell.
- 山梨正明 1987. 「深層格の核と周辺」、『言語学の視界』pp. 59-72、大学書林。
- 1989. 「言葉の認知と意味の計算(I)-(II)」、『数理科学』No. 309, No. 310.
- 1994. 「連載：日常言語の認知格モデル」、『言語』Vol. 23.